

民主党オープンセミナーから見た政策

堀内正範 朝日新聞社社友 「月刊丈風」編集人

民主党オープン・フォーラム 近現代史研究会

第一回

1 「今、政治家が歴史を学ぶ意義」

講演者 岩見隆夫氏 毎日新聞客員編集委員
二〇一三年二月二一日 一七時～一八時
参議院議員会館B一〇七会議室

[民主セミナー1 岩見隆夫氏 20130224](#)

第二回

2 「田中角栄の平和思想」

講演者 早野透氏 朝日新聞社社友 桜美林大学教授
二〇一三年三月七日 一七～一八時三〇分
参議院議員会館B一〇四会議室

[民主セミナー2 早野透氏 20130307a](#)

第三回

3 「日本は今、歴史をどう使っていくべきなのか」

講演者 加藤陽子 東京大学文学部教授
二〇一三年三月二七日 一七時～一八時
参議院議員会館B一〇四会議室

[民主セミナー3 加藤陽子氏 20130327a](#)

- 1 「憲法改正」の論議に平和主義の側から参加する
- 2 「特性ある地域の活性化」が平和と国防の礎
- 3 「国際的孤立」を回避する
- 4 世論と乖離しない党再生

2009年に国民の大きな期待を受けて政権についた民主党は、2012年暮れの総選挙で“歴史的敗北”を喫した。「疾風勁草」の試練に遭遇して、何が残り、誰が引き継ぐのか。党再生の道を模索するなかで「近現代史を学ぶ」セミナーがはじまった。座長は藤井裕久党最高顧問。オープンセミナーであり、党員でないわたしも参加する機会を得ている。

第一回の講師である岩見隆夫氏から「歴史は戦争の歴史」とする発言があり、それに

返して座長の藤井さんが同じことだけれどもとあって、「歴史は平和の歴史」と重ねたところに、このフォーラムの持つ「多重性」が示されている。

三回目を終えて毎回講師はかわっても「戦争と平和の多重性の“今”を知る」というのが、セミナーを底流する問題意識になっている。

半世紀を超えて堅持してきた「平和」の裏で、平和を体現していた「戦争を知る人びと」が去っていった。いまや現役世代は「戦争を知らない人びと」である。不安定な世相のなかで偏狭なナショナリズムがうごめき、「平和憲法」を戦争の側から改変しようとする安倍政権や同調者の主張が勢いを増している。

それと対峙して、近代の歴史で経験した「戦争と平和」の多重性を平和の側から読み解くことで、自分の国は自分で守る「平和維持」の意識を「戦争を知らない」国民に醸成すること。それが「今、政治家が歴史に学ぶ」ことであり、この国の将来にむかって政治家や学者や官僚や経済人やジャーナリストがなすべき努めなのだという確認が会場に生じたのは、第一講演者の岩見さんの強い提案によってであった。岩見さんは、民主党として「憲法」論議は受けて立つべきであるという。「歴史を知り未来を見通す政治家の責務」への要請を、政治ジャーナリストとして会場の政治家に突き付けた格好になった。

二回目の早野透氏は、「田中角栄」という大正生まれの政治家を取り上げた。終幕での「金権政治」が角栄像を覆ってきたが、民主主義・金権政治・平和思想が今、多面的に田中角栄をとらえるファクターだという。

「民主主義」と「平和思想」のふたつこそ、敗戦でうちひしがれた自らを鼓舞し、戦後の民衆の心情を揺さぶりつづけた政治的原点で、それは「大正」という時代の雪国越後の貧しい農村に生まれて、「二等兵」という軍隊体験を持った若い日の経歴に由来すると早野さんは指摘する。国家より地域にむかう「列島改造」が田中角栄という政治家の「平和と平等」を礎とする政策であった。大正生まれの二等兵がもつ「国家」と「国軍」に対する根深い疑念を取り上げ、「地方」と「平和」に対する強い期待を語っている。

三回目の加藤陽子氏は、ふたつの視点を指摘した。ひとつは「国際的孤立」をしない外交努力であり、もうひとつは国民から乖離しない政治のありようである。

三つのセミナーからみた政策は、安倍自民党内閣に対峙する民主党の立場を示している。
①「戦争」の側から国の戦力を強めようとする「憲法改正」に対して、「平和」の側から国防意識を強める「憲法護持」を継続すること。討論を通じて自分の国は自分で守る「平和維持」の意識を「戦争を知らない」国民に醸成すること。②「地域の活性化」によって「平和主義」の国防意識を国民に醸成すること。③国論（世論）や外交によって「国際的孤立」をまねかないこと ④世論と乖離した党再生にならないこと である。

「戦争を知る」立場にあり、みずからの人生が平和の証である高齢者として、戦争・戦禍の体験を語ること、地域特性の息づく地域を再生することなど、高齢者の参加がもたらされている政策といえよう。（堀内正範）